

## 中相範疇としてのフランス語代名動詞

井 口 容 子

### 1. 中相範疇とフランス語代名動詞

ラテン語の、受動・中相の機能を兼ね備えた形態であった*amor*, *audior*等、語尾の *-r* で特徴付けられる形式にかわって、ロマンス語においては再帰代名詞の *se* をともなう形が中相の機能をになう形式として発達したというの、しばしば指摘されることである。近年、言語類型論および認知言語学の分野において、インド・ヨーロッパ系の言語にとどまらず、さまざまな系統・地域にわたる言語において、本来は「再帰」の機能をもっていた形式が、「中相」さらには「受動」へと機能変化していく過程がみとめられ、これを「文文化 (grammaticalization)」の事例として理論的に分析する研究が展開されており、注目に値する。

柴谷 (1997) は「文法範疇は常に通時的変化にさらされ、それによって共時的には多義的様相 (polysemy) を呈する」(p.19) と指摘する。現代フランス語の代名動詞にみられる多機能性、そしてその機能間にとめられる連続性は、まさにこのような背景をもつものであるといえよう。

本稿はこのような視点から、代名動詞の問題を捉えなおしてみようことをめざすものである。

### 2. 再帰標識の拡張

#### 2.1. Kemmer (1993, 1994) による分析

##### 2.1.1. 「再帰」と「中相」

「再帰」から「中相」への機能変化の過程を具体的に検討する前に、そも

そも「再帰」、「中相」というそれぞれの文法範疇の意味するところを、はっきりさせておかななくてはならない。しばしば同一視されがちなのこの二つのカテゴリーを、あえて区別する根拠はどこにあるのか、ということである。

次の(1) - (4)は、いずれも一般に「代名動詞の再帰的用法」として分類されるものである。

- (1) Paul se regarde dans la glace.  
'Paul looks at himself in the mirror.'
- (2) Paul se lave.  
'Paul washes himself.'
- (3) Paul se lève tôt.  
'Paul gets up early.'
- (4) Paul se promène dans le jardin.  
'Paul takes a walk in the garden.'

Kemmer (1993) にしたがえば、このうち(1)は「再帰 (reflexive situation type)」であるが、(2) - (4)はいずれも「中相 (middle situation type)」ということになる。

フランス語においては、「再帰」も「中相」も同じ *se* という標識 (marker) で表されるため、この二つの区別はとらえにくい。この二つのカテゴリーを異なる標識で表す言語もある。たとえばラテン語においては、「再帰標識 (reflexive marker)」は代名詞の *sē* であるが、「中相標識 (middle marker)」は動詞接尾辞の *-r* であった。ラテン語のように、「再帰」と「中相」の区別が文法的に実現されている言語は、さまざまな系統にわたってみとめられる。Kemmer (1994) は、ロシア語、古典ギリシア語、サンスクリット、トルコ語、ハンガリー語の例をあげている<sup>1)</sup>。

「再帰」と「中相」の意味的なレベルにおける相違を示すため、Kemmer (1993, 1994) は、「出来事 (event)」に参加する二つの項、「始動者 (Initiator)」と「終点 (Endpoint)」の「分化の度合い (relative

distinguishability of participants)」という概念を導入する。分化の度合いが最も高いのは、プロトタイプの他動詞文であり、対極にあるのが自動詞文である。「再帰」と「中相」はいずれもこの二つの中間に位置するものであるが、両者の間の相対的な関係は、「再帰」の方が「中相」よりも分化の度合いが高いということになる (Kemmer 1994:208-209)。

### 2.1.2. 拡張の過程

ラテン語の *sē* は、現代ロマンス語における *se* や *si* とは異なり、再帰的な意味領域にほぼ限定されていた。中相的意味を表すのは、中相標識である接尾辞 *-r* の領分であった。それが、*-r* の形態の衰退とともに、*se* がしだいに中相領域に浸出していく。このように、本来は再帰標識 (reflexive marker) として機能していたカテゴリーが、中相標識 (middle marker) に移行していくという機能変化は多くの言語においてみられる。

Kemmer (1993) によると、北方のゲルマン語においては、興味深いことにこのような意味・機能的な拡張にもなっており、形態的な「文法化 (grammaticalization)」もみとめられる。古ノルド語 (Old Norse) の中相を表す接辞 (affix) である *-sk* は、ゲルマン祖語の再帰代名詞 \**sik* を起原とする。*-sk* ははじめ、\**sik* が先行する動詞に結合した場合の、無強勢の接語代名詞 (clitic) としてあらわれた。それが早くも古ノルド語の時代、接辞へのステータスの移行を完成させている。このことは、動詞と *-sk* の間に他の要素が介在できない等の事実によって裏付けられる。接辞となった *-sk* は、もはや、何らかの対象を指示するという、「代名詞」としての指示機能はもたない。もっぱら「中相標識」として、動詞の意味の一翼をにっている (Kemmer 1993:185-186)。

フランス語の場合、*se* はカテゴリーとしては接語代名詞である。形態的な文法化の段階としては、代名詞と接辞の中間的な段階に位置するということができる。

意味・機能的側面の考察にもどうぞ。Kemmer (1993) は、Hatcher (1942)

のデータをもとに、ラテン語から現代フランス語に至るまでの、*se*の拡張の過程を示している。これによると、*se*は中相領域のうちでも、まず「身体動作の中相 (body action middle)」から浸入したという。Kemmerはさらに、スカンジナビア語の場合は、中相システムの発達はテキストの出現以前になされたため直接的証拠はない、と留保しながらも、おそらくはロマンス語の場合と同様、再帰代名詞の \**sik*を起原とする中相標識の *-sk*はまず「身体動作の中相」の領域に浸出したものであろうと予測する。なぜなら「身体動作」は、中相領域のうちでも、「出来事 (event)」にかかわる「始動者 (Initiator)」と「終点 (Endpoint)」という二つの参加者を、比較的分化して認識しやすい領域であり、その意味において「再帰」に近いといえることができるからである (Kemmer 1993:187)。

一方、フランス語においてはいわゆる「受動的代名動詞」がそれにあたる「受動的中相」に関しては、ロマンス語においても、スラブ語においても、遅い時期になって発達したものと指摘する (Kemmer 1993:148)。

## 2.2. 柴谷 (1997) の分析

ところで、中相範疇のもうひとつの重要な領域に、「自発的中相 (spontaneous middle)」がある。これと受動的中相 (passive middle) との関係について、Kemmer (1993) はともに中相範疇のうちでも周辺的な用法であるとするだけで、文法化におけるこの二つの相対的な位置付けを明確にしてはいない。この点に関して、もう一步踏み込んでいるのが柴谷 (1997) である。柴谷は、「自発」を、中相範疇の拡張において、「再帰 (reflexive middle)」と「受動 (passive)」の中間段階に位置するものとしてとらえている。

中相範疇が、この発達の過程のどの段階まで到達しているかは、言語によって異なる。たとえば、柴谷 (1997) によると、シンハラ語の場合は、再帰、相互、身体動作の中相 (body action middle)、認知の中相 (cognitive middle) という用法をもつが、まだ自発は発達させていない。これに対し

て、ドラヴィタ語族のテルグ語では、自発の段階にはすでに達しているが、受動的中相の用法はまだ持たないようである（柴谷1997：22-24）。

### 2.3.

以上、Kemmer (1993, 1994)、柴谷 (1997) によってそれぞれ示された、中相範疇の機能拡張の過程をみてきた。ここで明らかになった純然たる「再帰」から「身体動作の中相 (body action middle)」を経て、「自発」さらには「受動」へというこの文法化のプロセスをふまえた上で、フランス語の代名動詞の考察に移りたい。本稿で特に注目するのは、「姿勢の変化を表す動詞」と、Kemmer、柴谷のいう「自発 (spontaneous middle)」にあたる「中立的代名動詞」である。「姿勢の変化を表す動詞」は、身体動作の中相の中でも、自発との境界あたりに位置するものと思われる。フランス語における中相のこの二つの下位領域を詳細に考察することで、文法化の様相がより一層鮮明なものになると考えるからである。

## 3. 姿勢の変化を表す動詞 (Change in Body Posture)

### 3.1. 自動詞的性格

次のような文が、「姿勢の変化を表す動詞」の例である。

(5) Il s'est levé tôt ce matin.

'He got up early this morning.'

(6) Marie s'est couchée à dix heures hier soir.

'Marie went to bed at ten o'clock last night.'

「姿勢の変化を表す動詞」は自動詞的な性格をもつものであるといえる。これはKemmer (1993) のいう「出来事の参与者の分化の度合い」と結びつけて考えることができる。

「身体動作の中相 (body action middle)」はいくつかの下位クラスに分類することができるが、これらの中で「出来事の参与者の分化の度合い」は一様ではないと思われる。Kemmer (1994) は「身体部位の行為への関与の

程度」ということにも言及している。「姿勢の変化を表す動詞」は、「身体の手入れを表す動詞 (grooming verb)」などと比べて、「出来事の参加者の分化の度合い」が低いといえることができる。Kemmerは次のように指摘する。身体動作を表す動詞 (body action verb) において、身体部位 (body part) は被動者でありながら同時に行為 (action) の遂行にあたって多かれ少なかれ関与をしており、その関与の程度は動詞のタイプによって異なる。そしてこの関与の程度が高くなればなるほど、他者に向けられる行為とはみなしがたくなり、一項述語に近づくのである。たとえば「鬚を剃る」、「髪を梳る」といった「身体の手入れ」を表す動詞の場合、「鬚」や「髪」といった身体部位が行為の遂行に関与する度合いは非常に低い。これに対して、「起きる」、「座る」等の「姿勢の変化を表す動詞」の場合は、全身が対象となる動作であるだけに、関与の度合いは高くなる。そして、フランス語でいえば、*se promener* のような代名動詞が相当する、「空間的な移動を伴う動作」になると、関与の度合いは最も高くなる (Kemmer 1994 : 200-201)。

Kemmerの類型論的データによると、「身体の手入れを表す動詞」の場合は、自らの身体に向けられる行為と、他者の身体を対象とする行為とが同じ語根にもとづく動詞形で表されることが多い。これに対して「移動を表す動詞」の場合は、自らの移動を表す動詞と、他者を移動させることを意味する動詞が同一の語根にもとづいているという例はより少なくなっている (Kemmer 1994 : 201)。Kemmer (1993) はまた、「姿勢の変化を表す動詞」は通言語的にみて、一般に自動詞 (bare intransitive) で表されることが多いという (p.55)。これらの事実は、意味的なレベルにおける「自動詞性」が、形の面に実現されたものと考えられることができる。

### 3.2. 「姿勢の変化を表す動詞」の意味構造

現代フランス語における、*se lever*, *se coucher*, *s'asseoir*等の「姿勢の変化」を表す代名動詞の意味構造を、もう少し詳しく検討してみよう。この

タイプの代名動詞の意味構造は、影山(2000)が、日本語の自動詞「立つ」の語彙概念構造として提示した(7)のような形で表すのが最もふさわしいものと思われる。

(7) 「立つ」: [x ACT] CAUSE [BECOME [x BE UPRIGHT]]

(影山 2000:63)

使役者と被使役者が同じxで表されているのは、同一指示を意味しており、この動詞が再帰の意味構造を持つことを示唆する。興味深いのは、影山(1996/2000)は、「立つ-立てる」のようなペアの場合は、「破れる-破る」のような場合とは異なり、自動詞の意味を表す「立つ」の方が基本であり、「立てる」はこの自動詞から「項のすり替え」という操作によって派生されたものであるとする点である。

日本語の「立つ-立てる」の場合は、形態的にも「立てる」の方がより複雑な形式をとっているということが指摘できるが、影山(2000)が「立つ」を基本とみなしたのはそれだけによるものではない。より普遍的な、意味構造に依拠する理由からである。影山のいう「項のすり替え」という操作は、英語のwalkのような移動推進動作を表す動詞の自他交替においてもみられるものである。このタイプの動詞は(8)にみられるような使役他動詞としての用法を持つ。

(8) I remember an old lady called Amy, whose husband came every afternoon to walk her round the grounds of the hospital.

(Bank of English; 収録 影山 2000:54)

影山は(8)にみられるwalkのような移動推進動作を表す動詞における「項のすり替え」の操作を、次のように記述する。

(9) [x ACT <manner>] CAUSE [x MOVE [<sub>path</sub> ]]

↓

他者(介添え, 付き添い)

(影山 2000:53)

影山(1996/2000)の主張は次のようなものである。walkのような動詞は、

通常、主語自身が足を動かすという行為 (ACT) によって移動していく (MOVE) という状況を表す。したがってACTの主体とMOVEの主体は本来、同一指示であるはずである。ところが、非通常の状況として、本来は同一であるはずのこの二つの主体が別物になる場合がありうる。たとえば、よちよち歩きの幼児や、一人では歩行できない病人や負傷者がMOVEの主体となる場合がそれである。この場合、母親や看護婦などがACTの主体として選ばれることになる。ACTの主体が他者にすり替えられるのである。フランス語の *lever-se lever*、日本語の「起きる一起こす」のような「姿勢の変化を表す動詞」の場合も、同じことがいえる。このように、影山のいう「項のすり替え」は、本来同一指示の主体を別指示にするという機能をもつものなのである。

ところで、「姿勢の変化を表す動詞」と並んで、「身体的行為の中相 (body action middle)」の主要な下位クラスの一つとしてKemmer (1993) があげているものに、「移動を伴う動作 (translational motion)」がある。フランス語の代名動詞では、(10) にみられる *se promener* がその代表例と考えられる。

(10) Il se promène dans le jardin.

‘He takes a walk in the garden.’

この *se promener* と、(11) にみられるような対応する他動詞の *promener* の関係は、英語の「移動推進動作を表す動詞」の *walk* と同様に、「項のすり替え」の関係であるということが出来る。

(11) Il promène son chien dans le jardin.

‘He walks his dog in the garden.’

この動詞の場合においても、基本的なのは、自動詞的概念の方である。そして本来なら同一であるはずの、行為を始動する主体 (使役主) と、移動の主体をあえて別物にしたのが、(11) のような他動詞構文であるということが出来る。

### 3.3. 通時的考察

3.2. 節においては、影山 (2000) に従い、「姿勢の変化を表す動詞」、および「移動を伴う動作を表す動詞」の少なくとも一部のもの (*promener-se promener* など) は、自動詞的概念を表す形式を基本とし、他動詞形はこれから派生されたものであるということを見てきた。それはこの種の動作において、自動詞、他動詞いずれの状況が、より自然な、通常の状況を表しているかという、意味的な根拠に基づくものであった。

このことはさらに、次のような歴史的事実によっても裏付けられるものと思われる。Alain Rey監修の *Dictionnaire historique de la langue française* は、*asseoir-s'asseoir* に関して、次のような興味深い指摘を行なっている。この動詞が現代フランス語におけるのと同様の、人間の身体動作を表す意味において用いられたのは、まず代名動詞形においてであり、11世紀のことであるという。他動詞の *asseoir quelqu'un* という用法は、それよりかなり遅く、13世紀になってはじめて確認されるというのである (p.128)。

また Kemmer (1993) には次の指摘がみられる。 *lever-se lever, asseoir-s'asseoir, coucher-se coucher* の、現代フランス語においては「非再帰-再帰」の対立が、「使役-状態変化」の意味的対立を表す対のうち、非再帰形がラテン語の時代から「使役」の意味を持っていたのは *lever* のみであり、他の動詞の非再帰形は、比較的遅い時期になって使役の意味を発達させてきたという (Kemmer 1993: p.156)。

以上のような事実をふまえて、次のように言うことができるものと思われる。本来は再帰の意味を表していた *se* の、中相標識 (middle marker) としての用法がしだいに定着していく中で、古フランス語の時代、*s'asseoir* 等の「身体動作の中相 (body action middle)」がいわばデポーネンス的な形で生まれた。これらの形式に対応する非再帰形がないわけではない。しかしそれらは、再帰形と並んで自動詞的概念を表すものであったり、他動詞用法を持っている場合でも他の意味合いにおけるものであったり、「使役-起動」の関係をもって再帰形と対立するものではなかった。この意味

において、これらの中相形態は、その誕生の段階において「デポーネンス的」なのである。非再帰形の使役他動詞としての意味は、もっと遅い段階になって、おそらくは他の「使役-起動」関係にあるペアとのアナロジーから、与えられたのではないかと思われる。

以上の推論が当を得ているとすれば、*s'asseoir*のような代名動詞は、少なくとも古フランス語において身体的行為を表す意味において用いられ始めた段階においては、「中相的意味状況 (middle situation type)」を表す自律的な形態であり、対応する使役他動詞から生産的な自動詞化のプロセスによって派生されたものではなかったということになる。このことは、その当時においてすでに *se* が中相標識としてかなり成熟したものであったことを示唆すると同時に、「姿勢の変化を表す」動詞においては、形態的には有標であるにもかかわらず、自動詞的概念を表す再帰形の方がより基本的なものであるという、3.2. 節で提示した見解を支持するものとなる。

#### 3.4. まとめ

以上、フランス語の「姿勢の変化を表す動詞」について考察してきた。このタイプの代名動詞の最も重要な特性は、次の二点であるということができる。第一に、自動詞形が基本で、他動詞形は影山 (2000) のいう「項のすり替え」によって派生されたものである。第二に、二つの項は、語彙概念構造上において同一指示の関係にある。Kemmer (1993) のいう出来事 (event) の二つの参与者、「始動者 (Initiator)」と「終点 (Endpoint)」の分化の度合いの低さは、この同一指示関係を反映しているということができる。

#### 4. 「自発的中相 (spontaneous middle)」—中立的代名動詞—

3 節においては、中相 (middle) の中心的領域ともいえる「身体動作の中相 (body action middle)」を論じた。本節においては、この中心的領域から一歩踏み出して、「自発的中相 (spontaneous middle)」を論じたい。2 節

でも述べたように、柴谷(1997)は「自発」を、中相範疇の拡張の過程において、「再帰(reflexive middle)」と「受身(passive)」の中間的段階に位置するものとしてとらえている。

#### 4.1. 外的起因者

このタイプの代名動詞も、前節で論じた「姿勢の変化を表す動詞」同様、対応する他動詞に対する自動詞という性格をもつ。だが、中立的代名動詞は、ある非常に重要な点において姿勢の変化を表す代名動詞とは異なる。それは、事態を引き起こす起因者が外的な存在、主語とは異なる第三者であるということである。姿勢の変化を表す動詞の場合は、代名動詞構文の主語である存在(entity)そのものが、変化を被る被動者(「被使役者」)であると同時に、起因者(「使役者」)でもある。このタイプの代名動詞の語彙概念構造が、(7)のような使役者と被使役者の同一指示関係を含む形で表すことができる所以である。これに対して中立的代名動詞の場合は、代名動詞構文の主語は、被動者ではあるが起因者ではない。事態を引き起こす起因者は、これとは異なる、外的な存在なのである。

フランス語の動詞の自他対応が論じられる際、自動詞形が再帰形をとって中立的代名動詞として実現されるか、それとも非再帰形をとるかということがしばしば問題となる。*fondre* 'melt', *sécher* 'dry', *brûler* 'burn' 等が非再帰形自動詞の代表例である。どのような動詞が自動詞用法において再帰代名詞をとるかということに関しては、語彙における特異現象的(idiosyncratic)な問題としてとらえる研究者が多いが、Rothemberg(1974)、Zribi-Hertz(1987)等はこの問題は共時的な規則性において説明できるとする立場をとる。Rothemberg(1974)は再帰/非再帰形自動詞の区別は、出来事を引き起こす原因が外的なものであるか、それとも内的なものであるかという相違によるものであるとする。動詞が記述する事態が外的な原因によって引き起こされる場合には再帰形、主語に内在する性質によって起こる場合は非再帰形自動詞として実現されるというのである。Zribi-

Hertz (1987) も再帰形自動詞 (Zribi-Hertzの用語では「再帰能格動詞」) の派生の条件のひとつとして、「外在的原因」ということに言及している<sup>2)</sup>。

この点に関するRothenberg (1974)、Zribi-Hertz (1987) の指摘はかなり説得力のあるものであると思われる。フランス語においては、自他のカテゴリーが整備されていく過程の中で、自動詞的概念のうちでも、内的原因によるものは非再帰形、外的原因によるものは再帰形中相形態として実現されるという分化がおこっていったのであろう。そしてこのことは次のような点を考えれば十分納得できることである。動詞の自他対応が論じられる時、自動詞形、他動詞形のいずれが意味的、そして形態的により基本的なものであるのかということが常に問題となる。自他の対応が「派生」の関係としてとらえる場合には、派生の方向が自→他であるのか、それとも他→自であるのかという問題にもつながっていく。外在的原因によって引き起こされる出来事というのは、概念的なレベルにおいて二項的であり、他動詞の方がより基本的であるということが出来る。したがって形の上でも、他動詞形の方が無標であり、自動詞形は形態的により複雑な形をとることが多い。フランス語において、基本となる他動詞に *se* が付与されて中立的代名動詞を形成する過程は、一種の自動詞化の過程であるということができるだろう。これに対して主語に内在する性質によって起こる出来事は、本質的に一項述語的性格をもつということができる。無標の自動詞形として実現されることは、十分予測されることである。

興味深いことに、内的原因／外的原因の相違によって、自動詞的概念の実現パターンが異なるという現象は、他の言語においてもみとめられる。Kemmer (1993) によると、現代アイスランド語においては、外的動作主によって引き起こされる可能性の高い出来事は中相標識によってマークされることが多いのに対し (ex. *opna-st* 'open', *fylla-st* 'fill', *loka-st* 'close'), 外的動作主によらずに生起する出来事の場合には、古いゲルマン系言語の状態変化動詞の標識である *-n-* によってマークされる傾向が強いという (ex. *harðna* 'harden', *kolna* 'cool', *þorna* 'dry (out)', *braðna* 'melt', *rþðna*

‘redde’) (Kemmer 1993:146-147)。これはまさに、外的原因による出来事は中相標識である *se* を伴った代名動詞形として実現され、内的原因による出来事は無標の自動詞形で実現されるというフランス語の言語内パターンと、ぴったり重なるものであるといえる。

#### 4.2. 中立的代名動詞の意味構造

中立的代名動詞の意味構造はどのような形で表すことができるだろうか。この点に関して、まず影山 (1996/2000) の分析を検討してみたい。影山はフランス語の中立的代名動詞に相当する、日本語の「破れる」、「折れる」といった動詞や、英語の自動詞用法の *open*, *break* 等を「能格動詞」と呼び、(12) の「反使役化」の操作によって対応する他動詞から派生されるものとする。

- (12) [x CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]]  
 →[x=y CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]]  
 (影山 2000:41)<sup>3)</sup>

「反使役化」は、語彙概念構造において使役者を被使役者と同一物とみなす操作である。影山は、「反使役化」は3節においてみた「項のすり替え」の操作とちょうど逆の機能を果たすものであるとする。「項のすり替え」が「本来同一指示の主体を別指示にする」機能をもつものであるのに対し、「反使役化」は「元来、別の指示物を同一指示に換える操作」なのである(影山 2000:63)。したがって派生の方向も、「立つー立てる」のペアにみられるような「項のすり替え」の場合には自動詞→他動詞であるのに対し、「反使役化」の場合には他動詞→自動詞となる。

影山の分析はいくつかの興味深い点と、問題点をあわせもっている。能格動詞の場合は、他動詞の方が基本であり、自動詞はそれから派生されたものとする点は、我々の立場と一致する。だが、使役者と被使役者を同一指示関係にあるものとみなす、すなわち状態変化を受ける対象が同時に起因者でもあるとする分析は、我々の見解とは異なる。4.1. 節でみたよう

に、我々は中立的代名動詞の起因者は、あくまで外的存在と考える。この点において、むしろ Levin & Rappaport Hovav (1995) の使役・起動交替の分析に近いものであるといえる。Levin & Rappaport Hovavによれば、英語の動詞 *break* の自動詞用法と他動詞用法それぞれにおける LSR (lexical semantic representation; 語彙意味表示) と項構造 (argument structure) は、次の (13)、(14) のような形で表される。

(13) intransitive *break*

LSR                    [[x DO-SOMETHING]CAUSE[y BECOME BROKEN]]

↓

Lexical binding       $\phi$

Linking rules

↓

Argument structure

<y>

(14) transitive *break*

LSR                    [[x DO-SOMETHING]CAUSE[y BECOME BROKEN]]

Linking rules        ↓

↓

Argument structure x

<y>

(以上、Levin & Rappaport Hovav 1995: 108)

自動詞、他動詞いずれの *break* も、LSR は共通して使役の構造である。他動詞 *break* の場合、起因者の *x* は外項として項構造上に実現されている。これに対して自動詞 *break* の場合は、*x* は存在量子化 (existential quantification) によって語彙的に束縛されており、項構造上には実現されない。

中立的代名動詞の意味構造を、どのような形で定式化するかという問題は、さらに検討を要するものであると思われ、今後の課題としたい。その際に、次のことを念頭におく必要がある。すなわち、中立的代名動詞は、次の二つを重要な特性としてもつものであるといえる。第一に、他動詞形を基本とし、そこから派生されたものである。第二に、外的原因によって引き起こされるものである。中立的代名動詞の語彙概念構造は、この二つ

を反映したものでなくてはならないと思われる。

## 5. 再帰—自発—受動

「自発的中相 (spontaneous middle)」はさまざまな点において、「姿勢の変化を表す」タイプの中相と類似している。両者とも、対応する他動詞に対する自動詞という性格を持つ。またいずれも「変化」を表す概念であり、語彙的アスペクトの観点からいえば完了的 (telic) である<sup>4)</sup>。フランス語の代名動詞研究においても、このような点をとらえて、*se lever*等は再帰的代名動詞と中立的代名動詞の境界的存在であるということがしばしば指摘されてきた (cf. Melis (1990)、井口 (1998))。典型的な中相の領域とされる「身体動作の中相 (body action middle)」から「自発」へ向かう出口あたりに位置するのが、「姿勢の変化を表す動詞」であるといえるのではないか。「姿勢の変化を表す動詞」を直接的なモデルとして、メタフォリックな拡張によって、無生物の状態変化を記述する中相が生まれたものと思われる。

だが、「姿勢の変化を表す動詞」と中立的代名動詞の間には、決定的な違いがある。それは中立的代名動詞、すなわち「自発」の段階に至ってはじめて出来事を引き起こす起因者が、(主語とは異なる) 外的な存在になったことである。これは次なる段階、「受身」に通ずる道を切り拓くものである。

「受動的な中相 (passive middle)」(フランス語においては「受動的代名動詞」) の段階になると、この外的起因者の存在がはっきりと意識されるようになる。いわゆる「潜在的動作主」である。このことは、典型的な再帰から身体動作の中相を経て自発に至るまで、一項述語に向って収斂を続けてきた過程が、ここで再び、二項述語に向い始めたことを意味する。

ただ、典型的な受動文とは異なり、この動作主はあくまで「潜在的」なものであり、明示的に文中に存在することはできない。フランス語を始め、多くの言語において中相標識 (middle marker) による受動的表現はこの段

階にとどまっている。だが、さらに一歩進んで、本格的な受動構文の段階に至った言語もある。當野(2000)は、現代スウェーデン語における接辞-sは、歴史的に「再帰→中相→受動」と発達したものであるが、他の多くの言語にみられる再帰構文から発達した受身の場合とは異なり、動作主を斜格で表すことが可能であり、またテンスに関する制約もみられないという。

- (15) Smittan           spred-s av råttorna.  
infection. DET spread-s by rats. DET  
‘The infection was spread by the rats.’

(當野 2000:207)

接辞-sは自發文、受動文、心理動詞形成の機能をもつが、「身体動作の中相」のような中相の中心的用法では現在では用いられない。そのような領域では、やはり再帰代名詞から発達したもうひとつの中相標識である-sigが用いられるという。當野はこのような点をふまえて、「接辞-sはすでに中相範疇としては崩壊しかかっていると考えるのが妥当である」と指摘する(p.207)。

フランス語においても、受動的中相の典型的な領域から一歩踏み出しかけていると思われる例が、しばしばみられる。筆者は井口(forthcoming)において、スペイン語、イタリア語等においてみられるいわゆる「非人称のse (impersonal se)」に近い意味的特性を持つと思われる用例に関して分析を行った。

## 6. 結 語

フランス語の代名動詞のさまざまな用法は、純然たる「再帰」から「身体動作の中相」を経て、「自発」さらには「受動」へという、文法化のプロセスの中に位置付けることができる。

本稿においては、身体動作の中相の中でも、自発的中相との境界あたりに位置すると思われる、*se lever, s'asseoir*等の「姿勢の変化を表す動詞」

と、自発的中相である中立的代名動詞に特に注目して分析を行なった。この二つは、共に他動詞に対応する自動詞という性格を持つものであるが、次の二つの点において大きく異なる。第一に、「姿勢の変化を表す動詞」は、自動詞的概念を表す形式を基本とするものであるが、中立的代名動詞はこれとは逆に、他動詞の方をより基本的な形式とするものである。第二に、「姿勢の変化を表す動詞」においては、主語名詞句の指示対象が、変化の主体であると同時に起因者でもあるが、中立的代名動詞の場合は、起因者は主語名詞句とは別の、外的存在であるということである。特にこの第二の点は、次の受動的中相の段階につながる道を拓く、重要なものであるといえる。

代名動詞の問題は、動詞の自他の問題とも関連する、非常に興味深い問題であるといえる。今後もさまざまな視点から考察を続けていきたい。

#### [注]

- 1) Kemmer (1994) は、ラテン語やロシア語のような、「再帰」と「中相」を異なる標識で表す言語を two-form language と呼ぶ。これに対してフランス語やドイツ語のような「再帰」と「中相」を同一の標識で表す言語を one-form language と呼ぶ。
- 2) フランス語の再帰／非再帰形自動詞の区別は、動詞の「非対格性 (unaccusativity)」とも関連しており、興味深い。これに関しては、井口 (1995) を参照されたい。
- 3) 影山 (1996) においては「反使役化」は次の (i) のような形で定式化され、CAUSE ではなく CONTROL が用いられている。
 

(i) [x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]  
       →[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]  
       (影山 1996: 145)

 だが影山 (2000) においては、使役関係は CONTROL は使わず CAUSE で統一してあるため、本稿においてもその形で引用した。
- 4) 中立的代名動詞の完了性に関しては、井口 (1995) を参照されたい。

#### [参考文献]

- Hatcher, A.G. (1942) : *Reflexive Verbs : Latin, Old French, Modern French*, Baltimore : John Hopkins Press.
- 井口容子 (1995) : 「フランス語の再帰／非再帰形自動詞と非対格性」, 『言語文化研究』

- 第21巻, 広島大学総合科学部紀要V, 247-266.
- 井口容子 (1998) : 「フランス語の再帰的代名動詞と中立的代名動詞」, 『STELLA』第17号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 49-64.
- 井口容子 (forthcoming) : 「イベント記述的性格をもつ受動的代名動詞」, 『広島大学フランス文学研究』20, 広島大学フランス文学会.
- 影山太郎 (1996) : 『動詞意味論－言語と認知の接点－』, くろしお出版.
- 影山太郎 (2000) : 「自他交替の意味的メカニズム」, 『日英語の自他の交替』, ひつじ書房, 33-70.
- Kemmer, S. (1993) : *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Kemmer, S. (1994) : "Middle Voice, Transitivity, and the Elaboration of Events", in Fox, B. & P.J.Hopper (eds), *Voice: Form and Function*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 179-230.
- Levin, B. & M.Rappaport Hovav (1995) : *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Melis, L. (1990) : *La voie pronominale: la systématique des tours pronominaux en français moderne*, Duculot, Paris.
- Rothemberg, M. (1974) : *Les Verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*, Mouton, La haye.
- 柴谷方良 (1997) : 「言語の機能と構造と類型」, 『言語研究』第112号, 日本言語学会, 1-32.
- 當野能之 (2000) : 「現代スウェーデン語の再帰代名詞について」, 『日本言語学会第120回大会予稿集』, 日本言語学会, 204-209.
- Zribi-Hertz, A. (1987) : "La reflexivité ergative en français moderne", *Le Français Moderne* 55, No 1 / 2, 23-54.

### 〈辞書〉

*Dictionnaire historique de la langue française*, Tome 1, Rey, A., Le Robert, 1993.

## Les constructions pronominales en français comme la voix moyenne

Yoko IGUCHI

On note souvent que les formes pronominales des langues romanes se sont développées en remplaçant la voix ancienne du latin chargée d'exprimer aussi bien le moyen que le passif. Or Dans le cadre de la typologie linguistique, on considère le développement de la catégorie moyenne comme une instance de la «grammaticalisation» (Kemmer 1993, Shibatani 1997). C'est sous cet aspect que nous analysons les constructions pronominales en français dans cette étude.

Nous nous concentrons surtout sur deux types de verbes pronominaux: l'un est le «verbe pronominal neutre», l'autre est le «verbe pronominal du changement de la position physique», qui constitue une des sous-classes du «moyen de l'action physique». Ces deux types de pronominaux partagent plusieurs propriétés en commun. Ils sont, tous les deux, de caractère «intransitif» du point de vue sémantique. Puis, pour ce qui concerne l'aspect lexical, ces deux pronominaux sont perfectifs.

Mais ils se différencient sur deux points cruciaux. Premièrement, l'événement exprimé par les verbes pronominaux neutres est provoqué par une certaine cause extérieure, alors que celui exprimé par les verbes du changement de la position physique est causé par l'énergie interne du référent du syntagme nominal sujet.

Deuxièmement, pour les pronominaux neutres, c'est la forme bi-valente qui est la base. La forme mono-valente est dérivée de cette forme de base. Pour le cas des verbes pronominaux du changement de la position physique, la forme mono-valente constitue, malgré sa forme morphologique plus compliquée, la forme fondamentale et autonome. C'est plutôt la forme bi-valente qui est de nature dérivée.

Nous concluons que le verbe pronominal du changement de la position

physique se situe, au cours de la voie de la grammaticalisation, à la frontière des deux grandes catégories du moyen, le «moyen de l'action physique» et le «moyen spontané». Et cette voie mène, de façon tout à fait naturelle, à la catégorie prochaine du «moyen passif».